

古事記を読む会 2014年7月6日 NO.3

6月8日(日)午前10時～第3回古事記を読む会が開かれた。音読をすることにやや慣れたのか？時間を残して予定のところまで一気に進んだ。

稲羽の素兔に似たお話がどこかの国にもあるんだって！大国主の相棒のスクナヒコナは鉄の利器(スキ)をもっている。以前の農業に比べて優れものをもつ人か？沼河日売との歌のやりとり。この心の動きやその表現に魅せられる思いも。何しろよく知られている大国主のお話であるが、知らないことがいっぱい。不思議なこと分からないことがいっぱい。

第3回は、大国主神の部分 「稲羽の素兔」 「根の堅州国訪問」 「八千矛の神」 「大国主の系譜」 「大国主の国作り」 「大年神の系譜」と 読み進んだ。大国主の名前が多くあることなど会員相互の意見交換もあった。話題も多く、楽しく参加できた。参加者11名

【心に残ったことを・・・会員のメモから】

- ・久延毘古は、どうして全てを知っているのでしょうか。
- ・五七調で謳った歌、男が女を口説く文句や女が男に憧れている言葉は今も変わらないのでは？
- ・大国主は、いろんな女の人と結婚していますが、いろいろな土地を制定して行ったのを女にたとえているのかなと思いました。大国主と大物主の同一の話をもう一度教えてください。
- ・少名毘古那神はどうして初めに名乗らなかったか不思議に思いました。何か言いにくい理由があったのでしょうか？指の間からくぐり抜けて行った人だから自由人とか、あまり縛られたくないひとなのでしょうか？菓の神様でまじめなイメージだったので意外でした。
- ・大国主神の兄弟が結婚したいという八上比売は、須世理比売のあとに結婚したから正妻になれなかったのか。それとも地位からなのか。八上比売はそもそも何者なのか。兔が渡ってこようとした意味・目的はなにかあったのか。なぜみんなは八上比売と結婚したいと思ったのか。
- ・大国主の結婚は、国譲りの話と共に弥生時代の小国家が統合されて、より大きな国が形成されていく過程を示す話しを考えています。
- ・大国主命(神)の話はワクワクします。国作りに重要な神であったことが分かりました。一つ一つの神の名・役割を見ていくと農業・産業に関することがあり、当時の鉄と米に関わる人の姿が感じられます。
- ・ウワナリネタミ→上に成る→後妻(若妻)語源におもしろさを感じる。
- ・古事記は誰に対して正当化したのか。高い知識を持った人達が長い歴史の中で得たものを他の国、文化が入ってきたところに示し、この国の主力になっていることを示したのか？物語風に。
- ・オホクニヌシ(大国主)とスクナヒコナ(少毘古那)との関係。このスクは、スキ(鉏)(スキですく)つまり、鉄利器の伝来のよび方がつづられ、オホドとの関係もおもしろい。オホは、オフ(負)と同根の言葉。具器文化の中で生まれた物語。